

体質にあった酒量を

飲酒によって体内に入ったアルコールの80%以上は、アルコール脱水素酵素によって、主として肝臓で、アセトアルデヒドという有害物質になります。このアセトアルデヒドは、1型・2型のアルデヒド脱水素酵素によって酢酸になり、最終的には二酸化炭素と水に分解されて排泄されます。

これら2種類のアルデヒド脱水素酵素のうち、2型は血液中のアルコール濃度が低い状態から働き始め、通常の飲酒では、アルコールから生じたアセトアルデヒドのほとんどすべてが、この2型によって代謝されてしまいます。ちなみに、1型は、血液中のアルコール濃度が一定以上にならないと働き始めません。

ほんの少しの酒量で、顔面が紅潮し、どうき、頭痛、時には血圧が下がってショック症状を起こす人がいます。その原因は、アルデヒド脱水素酵素のうち、低い濃度のアルコールに反応する2型が遺伝的に欠損しているため、血液中に多量のアセトアルデヒドが、分解されずに溜まってしまったためです。

この2型の欠損者は、欧米ではまれですが、日本では約40%の人にみられます。この体質的特徴を知らないでアルコールを飲んだ場合、たとえ少量でも、重症の急性アルコール中毒症状が起こる危険があります。特に年少者には、自分の体質を知らない場合が多いため、注意が必要です。

また、2型欠損者の飲酒は、食道がん発生と深い関係があるとされており本来酒に弱い2型欠損者の飲酒は、発がんという点からみても、危険度が高いといえます。

自分の体質を知り、それにあつた酒量を知ることが大切です。

平成11年11月

田中 正三